

# 2006 年度春公演「ジュリエット-Juliet Capulet-」チラシの推薦文

最近の若い演劇集団のほとんどは自己流での自作自演出。その結果の舞台は、一方の〈見方〉でしか捉えられず、演技者が〈道具〉になっていることが多い。彼の演出する『舞台』の特徴は、既成戯曲を新たに解釈し、再構成することにある。サローヤン『HELLO OUT THERE』、横光利一『幸福を計る機械』、そしていよいよ『シェイクスピア』に到達してきた。期待したい。

今泉おさむ

演出・評論／関西劇評誌「劇場通い」・同人、「悲劇喜劇」（関西劇信）執筆

2004年の「HELLO OUT THERE」を見た。彼（山本周）は死に際にポケットからスプーンを出した。乾いた金属の音がして彼は絶命した。目の前に横たわる彼の身体から哀切がだらだら流れ出る。こんなことフィクションなのに、私は確かに彼の最期に立ち会ってしまった。私をこんな目にあわせるなんて！

北村成美

なにわのコレオグラファー・しげやん／振付家・ダンサー

日本経済新聞 (夕刊) 2006年(平成18年)4月6日(木曜日)

## 夕悠関西

### 京都で実験劇「ジュリエット」

#### 女優6人、1つの役分担

様々な表情を見せるジュリエットたち（リハーサル中）

シェイクスピアの不朽の名作「ロミオとジュリエット」。そのヒロイン、ジュリエットが一度に六人も登場する新作劇「ジュリエット」が六日から三日間、京都市のアートコンプレックス1928で上演される。原作で描かれた、ロミオとのかなわぬ恋に心を痛めるジュリエットに焦点をあて、さまざまな思いを六人の役者たちが演じ分ける。深く熱心の動きを描き出すユニークな試みだ。

「どんなに苦しいこと、親の許しが得られず、ジュリエットはロミオと駆け落ちて家を抜け出すために仮死状態になる薬を飲むシーンだ。」

劇団ユニットYOU企画「ジュリエット」の新しい芝居「ジュリエット」は、一つのシーンに最大六人のジュリエットが現れる。ある時は一方向は受け入れがたい。感情の深みを出すための独創的な演出をする松浦友

「C」「G」「W」はそれぞれ、少女、大人の女性と、キャラクターを表現し、それに合う演技のできる役者多めだ。その時の心情の変化を表すとともに、十三歳の多感な少女ジュリエットが大人の女性に成長していく過程も表現しようとしている。ジュリエットたちの立ち位置も表現の重要なポイントになる。父や母との口論など気持ちが一点に集中しているときは集まって立ち、驚きや憤りなどで心が混乱しているときは舞台のあちこちにバラバラに立つ。客席との距離の遠近が感情の強弱も示す。

「舞台の空間をフルに活用して、テレビにはできない劇の表現の可能性を引き出そうとした」と松浦。

この劇は、ジュリエットの心情を強調する一方で、ロミオや周辺的人物は極力省かれている。「運命は自分の力で切り開くもの。ジュリエットはあえて自殺をさせず、親元から自立する道を選ばせたい」（松浦）と、筋書きも原作とは変えてしまった。

劇中の新しい試みは、ややもするとスタッフ側を独善的にし、観客と乖離（かいり）しがただが、それを避けるために時代を現代の米国に設定した。携帯電話での会話も盛り込み、原作を読む日本人の少女を「観客の代表」として劇中に登場させる。

さらに原作が二つの家の対立で表した隣人同士の憎み合いを、南北朝鮮の対立に置き換えて神父に説明させるなど、若い観客が身近に感じられるように工夫した。

「会場全体が劇空間として生きるようにしたい」（松浦）。役者十二人の小さな芝居での新たな仕掛けが効果を上げるか。観客のチマの反応に注目したい。（大阪・文化担当 田村雅弘）

## 「中西理の下北沢通信 WEB ページより」

20060406 演劇ユニット YOU 企画「ジュリエット-Juliet Capulet-」（アートコンプレックス 1928）を見る。演劇ユニット YOU 企画は京都芸術センターアートコーディネーターを務めた松浦友によるプロデュースユニッ

ト。表題から分かるとおりにウィリアム・シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」から題材をとって、テキストを引用しながら、自由に再構成した作品。この作品では「ロミオとジュリエット」の物語からジュリエットと彼女の家族（キュピレット家）だけに焦点をあてた。そのためジュリエットを6人の女優（古雅夏樹、松井千恵、木村千鶴、田之室かおり、福山香織、広田ゆうみ）が演じる。その代わり、ロミオをはじめとするモンタギュー家の人間はいつい舞台には登場しない。

この舞台が見ていて見飽きなかったのはこのジュリエットたちの演技ならびに存在感がなかなかよかったからだ。一連の台詞を別々の女優が引き継いでいうというやり方は簡単なようで実は相当に難しい。下手をすると学芸会でよくあるような割台詞になってしまいかねないところをうまくコントロールして、あるところはまるでクロスのように聞こえたり、ある場面では内面の声と実際の会話の同時進行のように聞こえたりとなかなか面白い効果がここから生まれてきていた。

最近、関西の若手劇団の公演をあまり見てないせいもあって、だれがだれなのかが分からないのが残念であるが、なかにはこの人はうまい、実力があると思わせる人や技術という面ではまだまだだけれど新鮮な魅力を感じた人もいた。

ただ、「ロミオとジュリエット」の劇化という意味ではいくつかの問題点もあった\*2。せっかく俳優がいい演技をしているのにどうしてこういうことをしたがるのと思い、頭をかかえそうになったのはこの物語にどう理由でだか不明だが、朝鮮半島の問題とか、それを含めた分断国家の問題とか、拉致問題とかを無理やり幕間狂言のような場面を挿入して取り込もうとしていたことだ。これはまったく必要なかった。

シェイクスピアの現代的解釈ではこういう風に現代の問題と重ね合わせたりするというのをよくやるのだけれど、「ロミオとジュリエット」ではそういう小ざかしい解釈を入れた舞台はこれまで見た限り、ほとんど失敗していた。というのはそもそも現代的解釈を入れようにもシェイクスピアが初演した時点ですでにこの物語は昔のヴェローナ（イタリア）だからありえたかもしれない古典的な構造を持つ悲劇だったからだ。さらにいうなら、そういう政治的な解釈でこの作品を構想するのであれば、すなわち、そちらの方が今回の上演に際して訴えたかった主題なのだとすれば今回のキュピレット側だけを取り上げるというやりかたは逆効果である、としかいいようがない。特に最後の方で「アメイジンググレイス」を生歌でいれる演出。いくらなんでもこれはないよ、と思ってしまった。

もうひとつ気になり、最初一瞬なにか勘違いしてるんじゃないかと思ったほど、激しい違和感を感じたのは、この舞台では原作においてジュリエットの乳母が担うべき台詞・役割をキュピレット夫人が担っていたことだ。家族に絡り込むという理由から乳母の存在を削ったのかもしれないが、これはいくらなんでも無理があったのではないか。キュピレット夫人は確かに原作においては旦那べったりで、いったいどういう人なのかがなかなか見えてこないところがある人ではあるのだけれど、いくらなんでもジュリエットの言いなりになって、敵対するロミオとの取次ぎなんかはしないのではないか。戯曲の再構成のやり方と演出に面白いところがあった舞台ただけにそういう点が残念だった。

演劇

## 枚方の魅力を舞台で表現

樋之上町在住の演出家・松浦友さんが発表

枚方を舞台に、自らのルーツをたどる青年と恋人の姿を描いた作品「ハーフ」を市内の演出家松浦友さん（27歳）が、10月に京都の劇場で上演しました。

脚本・演出・役者の三役をこなし、照明や音を極力抑え、セリフのみで淡々とストーリーが流れる舞台で、観る者の想像力をかきたてました。淀川河川敷や百済寺跡、樋之上団地など市

内11か所を再現した場面は、写真家の作品からイメージを膨らませたもの。「風景写真の世界を演劇でより厚みのあるものにしたかった」。どこにでもあるまちの代表として故郷の枚方を舞台にしたそうです。

演劇ワークショップや、枚方なぎさ高校での演劇の講座などの指導もする松浦さんは、「多くの人に演劇のおもしろさを伝えていきたい」と意欲的です。



ハーフの一場面  
(右から2番目が松浦さん)



広報枚方 2006年11月号

### 「上記公演をノベライズし出版した文芸社の作品講評より抜粋」

将来について思い悩む青年とそんな彼を見守り続ける女性、それぞれの彷徨と愛を描いた小説である。突然、姿を消した恋人の楠木悠を探す小泉蛍子と、故郷の各地を気ままに訪問する悠の姿が並行して描かれ絵とり、比較的シンプルな構造のストーリーとなっている。しかし、作者の執筆の意図が奈辺にあるか、これが分かれば物語構造の単純さは作品にとって必ずしもマイナスの要素とはならない。起伏に富んだ筋で読者を楽しませるのではなく、将来に漠然とした不安を抱える青年の姿を、その心の壁に分け入るようなヒッチで描き出すことがこの作品の眼目ののだ。その意味で現代に生きる若者の等身大の姿を描いた普遍性の高い一作といえるのではないか。

特徴的なのは、蛍子と悠のそれぞれのパートで描かれるのが、あくまでも「楠木悠」という人間についてである点だろう。悠のパートでは、彼の抱える葛藤や不安、迷いとといったない的な問題や自意識が主観として表現されているのに対して、蛍子のパートでは、悠を取り巻く人間関係の複雑さや困難、挫折と言った人生の機微を包括的に照らし出してもおり、安手の自分探しの物語とは一線を画した、人生賛歌に仕上がっているのである。

物語は、悠の行方を求める蛍子が、思い当たる場所を探しているところから幕が上がる。蛍子は悠の人生の痕跡を辿って様々な人と会っていくが、悠を捜すという行為が悠の過去を知ること、ひいては自分の知らなかった「楠木悠」という人間を見つめ直す行為になっている点が秀逸であった。一方、悠は自分の生まれ育った土地や思い出の場所、友人たちの元をあてもなく訪れている。自身の来し方を見つめ直す悠の行動は漠とした「自分探し」のようにも見えるが、その実、自分を再確認するための行為に他ならない。悠は在日朝鮮人二世という生い立ち（過去）を見つめ、演劇活動という未来に思いを馳せ、そうして蛍子という現在を再発見する。それだけに、最後に訪れるプロポーズは悠の蛍子に対する愛の表明であると共に、過去や未来に対する不安と訣別して、現在を大切にするという決意表明ともなっており、二人の行く末を応援したくなる読み手は少なくないのではないだろうか。（中略）将来に対する閉塞感から大きな夢や大志を抱けない若者が増えている昨今だけに、人生に迷った青年の葛藤と成長、決断を描いた本作は、生きにくさを感じる多くの現代人に明日を生きる勇気と励ましを与えたいと思う。いつの時代にも通じる普遍的なテーマが内包された本作を然るべき体裁で世に問いたいところである。

<input type="text"/>							🔍 サイト内検索
トップ	くらし	子育て 教育	健康・医療 福祉	学び・文化 スポーツ	事業者 向け	市政情報	

[トップ](#) >

## ☆演劇ワークショップで行った内容

[2018年5月4日] ID:18092

ソーシャルサイトへのリンクは別ウィンドウで開きます



中学生・高校生を対象に、演劇ワークショップ「楽しくお芝居をやってみよう!」を実施しました。

このワークショップは、コミュニケーションを図り、お芝居を体験してもらうことを通して演劇の楽しさを知ってもらうものです。このワークショップには、登録団体である枚方演劇連絡会の協力を得て、実施しました。

「シアターゲーム」という演劇的要素を取り入れたゲームをしてから、短いお芝居を実際に創って行きます。同じ内容のはずなのに、やる人たちによってこんなにも違うものになるなんて・・・。これが“演出”の力ってやつでしょうか。現役演出家によるナビゲートに沿って、演劇の幅と広さ、お芝居って技術と創造性なんだと身を持って感じました。



# 大阪府立枚方なぎさ高校 WEB 記事より

The screenshot shows a web browser window displaying the news page of HIRAKATA NAGISA HIGHSCHOOL. The browser's address bar shows the URL: [https://www.osaka-c.ed.jp/hirakatanagisa/hirakatanagisa/news/2018/engekinyumon\\_0215.html](https://www.osaka-c.ed.jp/hirakatanagisa/hirakatanagisa/news/2018/engekinyumon_0215.html). The website header features the school's logo and name in Japanese (大阪府立枚方なぎさ高等学校) and English (HIRAKATA NAGISA HIGHSCHOOL). A navigation menu includes links for TOP, NEWS, 入学案内, 学校案内, 教育内容, 進路状況, 学校生活, 部活動, PTA, and リンク. The main content area is titled 'ニュース' (News) and features a blue sidebar on the left. The primary news item is titled '授業「演劇入門」で最後公演を行いました。' (We held our final performance in the drama class 'Introduction to Drama'). The text describes a performance on Friday, February 15th, following a class of drama for 2nd-year students. It mentions the guidance of special instructor Matsuura and the performance of 'See You, Fly High' by Naonori Nagai, directed by Matsuura. The performance was well-received by students and staff. Below the text are four photographs: two showing students in a classroom setting and two showing a stage performance.

大阪府立枚方なぎさ高等学校  
HIRAKATA NAGISA HIGHSCHOOL

TOP NEWS 入学案内 学校案内 教育内容 進路状況 学校生活 部活動 PTA リンク

ニュース

授業「演劇入門」で最後公演を行いました。

2月15日（金）の放課後、本校の特色の授業の一つ「演劇入門」（2単位、2年生での自由選択科目）で、最終公演を行いました。  
1学期当初から、特別非常勤講師の松浦友さんの指導のもと、演劇を学んできた生徒たちが、1年間の締めくくりとして、「見よ、飛行機の高く飛べるを」（作 永井愛 演出 松浦友）を上演しました。  
90分を超える熱演に、鑑賞していた生徒や教職員も大いに感動しました。

